



「8050問題」
(親が80代、引きこもり当人が50代)が示すように、引きこもりが長引いている。これに対して、

榊田氏は「直したものはぶり返す。やすらぎの中で治ったものはぶり返さない」と提言する。

「無意識で起きた引きこもり」を、

わが子自身の力だけで解決するのは困難、「絶望」から「希望」やがて「自立」への道のりで貫けるものは「親の愛」のほかにないと言うのだ。

榊田氏は、親子の愛着を重視する心理学の知見に基づき、次の5つのプロセスを説く。①希望Ⅱ絶望状態から、わが子の心に「希望の灯」がともるように親は一貫性を持って支える。②意思Ⅱネガティブを基本とした陰陽混合する感情を親がしっかりと聴き取る。③目的Ⅱ心の中に湧き上がってくる「やってみよう」



榊田智彦 著
2160円 ハート出版
☎03-3590-6077

親から始まるひきこもり回復
心理学が導く奇跡を起こす
5つのプロセス

という欲求に基づき、少しずつチャレンジが始まる。④有能性Ⅱ実際に他者や集団の中に身をおき、勤勉に何かに取り組む自分の有能感と劣等性のバランスに直面し、葛藤する。⑤アイデンティティⅡ「自分は自分で良い」そして「社会や他者からもそんな自分で良いと思われる」であるという確信を持つ。すなわちアイデンティティの獲得に取り組んでいく時期。

評者は考える。社会の一員を育てようとする学校教育の立場からは、親子の愛着行動による解決を望めないケースもあるだろう。視野が狭く、世間体ばかり考えて、結局わが子を追い詰めてしまいう親も少なくない。社会教育による保護者の社会的視野の拡大や、ときには親から生徒を守るといふ社会的養護の視点が求められよう。ただし、社会化支援と同時に、本書のいう個人ケアの視点を忘れてはいけない。

(前聖徳大学教授・西村美東士)